

研究資料

「童子口伝書つき山水并野形図」の成立とその性格 下

江上 綏

七 「或書云」の部分

次に「或書云」の部分について検討する。この部分が「作庭記」の抜書であることを先に述べたが、この章の終りに述べる如く、この「或書云」に引く本文には谷村家本の本文にない部分や谷村家本と異なる部分があつて、谷村本及び、かなり多く流布している谷村本の転写本と、異った系統の「作庭記」によつたと^{註58}思われる。又「後京」（「後京極殿作庭記」の意）として、「作庭記」との校合が書き入れられてあるが、校合に用いられたものも、後に述べるように、元来谷村本の系統のものではなく、むしろ「或書云」の原本に近い系統のものであつたが、校合による谷村本系統の影響をも示していた写本であると思われる。

さて、「或書云」の本文について述べるならば、その抄録部分の谷村本との異同は、「山水并野形図」の前田家本と「童子口伝書つき山水并野形図」の「山水并野形図」の部分との異同より、はるかに大きい。即ち、三本の「山水并野形図」の部分は、前田家本と比べるとかなり省略されており、又、仮名を漢字になおしたり、文章の一部を漢文体の表記になおしたりした箇所はあるが、文章そのものは殆んど改変されておらず、内容の前後関係も同じである。しかし、「或書云」と谷村本「作庭記」の間には、内容の順序に大きな違いがあり、又、仮名を漢字になおしたり、漢文体表記に変えた部分がある他、「或書

「童子口伝書つき山水并野形図」の成立とその性格 下

云」で明らかに誤写と思われるものの中には、谷村本と同じ形の相当部分から、少くとも二、三回の転写を経たのでなければ説明できない誤写がいくつか^{註59}ある。

このように、少くとも二、三度の誤写を重ねなければ起り得ない誤りがかなりあるということは、これらの部分が谷村本と同じであるテキストから「童子口伝書つき」三本のような形になるまでの間に、少くとも三回の転写、おそらくは数回の転写を重ねたことを証するものと云えよう。京大本、無動寺本にその例が多いが、その大部分は太田本にも見られ、^{註60}太田本には親本から引いた承応三年（一六五四）の奥書があつて、それより前に京大本、無動寺本の系統と分れたことはまず確実であるから、この種の誤写はその殆んどが、それまでに現在見るような形になっていたと考えられる。即ち、その時期までに相当回数の転写が重ねられたことがわかる。先に述べた如く、前田家本に相当する「山水并野形図」の部分のテキストが文正元年（一四六六）に写された前田家本のテキストとそれ程の違いがないことを考えれば、ここに「或書云」として引く「作庭記」のテキストはそのころより相当前に谷村本の「作庭記」の系統と分れてそれまでにかんがりの転写を重ねたものと推測される。「作庭記」は、谷村本の書写年代だけから考えても、遅くも鎌倉初期—中期には存したのであるから、早くわかれた異本系統がいくつか存在したとしてもおかしくはない。「或書云」の本文がその一つであることは今見たところであるが、京大本、無動寺本系統の「或書云」の校合に用いられたものも、又、その一つであつたらしい。^{註61}

更に書誌学的に興味あることは、谷村本「作庭記」にはいつの時代にか加えられた朱書きの校註のようなものがあるが、その大部分が、京大本、無動寺本系統の「童子口伝書つき山水并野形図」の「或書云」の校合に用いられた「作庭記」（以下「或書云」校合本と称する）と近いテキストによっているらしいことである。比較し得る限りでも、谷村家本「作庭記」の校註は、片仮名で書いたもの（及び漢字で書いたもの若干）以外は、かなり早い時期（書体

から見ておそらく鎌倉時代)に施されたものであり、この校註と「或書云」校合本の間に、直接ではないにしても、何らかの関係のあることがわかる。^{註62}そこで、どちらの系統がどちらの系統に影響を与えたか、又、或いは、全く別の系統が両者に校註や異文の形で影響を与えたのかということを検討しなければならぬ。ここで問題になるのは、「或書云」校合本にあって、正しく古い形(文字遣いは別として)を残しているのではないかと考えられ、しかも谷村本の校註に反映していない部分が、いくつかあるということである。即ち、二頁目第七行「其上サマ。ハ」(谷村本「そのかみさまは」)、三頁目第二行校合本より補入の部分の「次ニ左右ノ」(谷村本「次左右の」)や、三頁目第五行「流シタルカワリナキ也」(谷村本「なかしたるかわりなきなり」)は、校合本からここに引く

挿図3 「童子口伝書つき山水并野形図」無動寺本、「或書云」書出しの部分

文が正しい原文を伝えているのではないかと思われる。最後の例で、「後京ニイ」とあるのは、「或書云」などの系統と谷村本の系統が分れる前に、既に正しい元の形「ハ」が「カ」に誤られ、その誤られる前の形を伝える何らかの写本によって、「或書云」の校合本に「イ」として校註

が施されていたのであろうが、前二者についても同様な事情があったのではなからうか。現に、太田氏架蔵本においても、「其上サマハ」、「流シタルカワリナキ也」となっているのみならず、京大本、無動寺本三頁目第二行に欠けていて、校合本から補入されている部分も、太田本には、欠けておらず、「次左右マ、」となっていて、これらの部分に関する限りいづれも、文字づかいは別として、その本文は谷村本「作庭記」と全く同じである。ここで問題になって来るのは、校註として加えられている、これらの異文が谷村本の校註にとり上げられていないということである。これらが意味の上から云ってより古い正しい形を伝えているということはまず明らかであるから、もし、谷村本の校合が、「或書云」の校合本と同じ系統でしかもこれらの校註が施された写本によって行われたのであれば、これらが谷村本の校合の際見のがされるのはおかしい。しかし、この疑問も、これらの例だけに限って考えれば、これらの校註が施される前の形のこの系統の写本によって、谷村本の校合が行われたと考えれば、説明出来ないことはない。しかし、この問題について考えて行くと、更にこの系統によって谷村本の校合が行われたのでないことを示唆する、次のような事実が浮び上って来る。即ち、谷村本の冒頭近く、「殿舎をつくるときその莊蔵のために山をつきしこれも祇園圖經にみえたり」とあり、「これも」の意味がわからなかったのであるが、これは、「或書云」一四頁目第六行から一五頁目第五行にかけて、「精舎ヲ立テ殿舎ヲツクル時其シヤウゴンノタメニ山ヲ築テ池ヲ堀リ石ヲ立遣水ヲ流シ泉ヲホル事ハ中天竺ヨリオロリ唐土ヨリツタハリタル也須達精舎ヲ造テ釋尊ニタテマツリシ時八大龍王來テ山水ヲナシテ山頂ヨリオトシ精舎ノ東ヨリ南面ヘ經ナカシ獸ノ口ヨリ土ヲ各四方ヘナカシクダス事四大河ノコトシ其精舎ノ前ニハ橋ヲワタセリ是モ祇園圖經ニ見タリ」とあり、この方が、文字づかいはともかくとして、もとの形を伝えているものであると考えられる。これは、谷村本に無い部分が祖本にもなく、これを後に補ったものとは考えにくい。それにしては、余りうまくできすぎている。現に、ここに書かれ

八 結 語

以上、「童子口伝書つき山水并野形図」のどの部分も室町時代にすでに存在したと考えてよいという結論を得たが、前田家本「山水并野形図」の奥書の中の「五巻」の書というのも、現在「童子口伝書つき」三本に見るような、まったく構成の書が一五世紀前半に既に存在し、前田家の第一の奥書の書かれた文安五年（一四四八）の書写の際には、それがすべて写されたが、第二の奥書に見られる文正元年（一四六六）の書写の際には、「山水并野形図」の部分だけが写されたか、或は、少くともそれだけが一種別扱いされ、同時に、「童子口伝書」のあとにあった系図と、第一の奥書とが、そのうしろに写されたと見るのが、最も自然であると考ええる。かつて森氏によって、信蔵が数巻の書を一巻にまとめた証左とされた前田本「山水并野形図」の一節、「山水ノ巻共多ク相伝スト云トモ我心ニ入事ト思シ巻ヲ一卷残スヘシ」も、もし信蔵が書き加えたものであるとすれば、このように解する方が理解しやすい。

以上述べたごとく、現在「童子口伝書つき山水并野形図」三本に見るのとはほぼ同じ構成の書が室町時代、一五世紀前半に存在したであろうというのが、この研究の第一の結論である。では、果して、従来、全く対立する様式を主張するように考えられることの多かった「山水并野形図」と「作庭記」の要素をもった異った部分と更にそれに、いずれにも見えない数項目とが、一つの書としてまとめられ室町時代に実際に用いられることがあったであろうか。森蘊氏は、前引「山水并野形図の研究」において室町中期ごろ一条兼良（一四〇二—一八）によって書かれた「尺素往来」の一部に、「前裁秘抄」即ち「作庭記」と「山水并野形図」の両方の影響のあることを論じられ、更に、又、早く発表された「室町時代に於ける前裁秘抄の影響」という論文^{註66}において当時の日記、記録類の中に、「作庭記」流の庭園論の片鱗がままた見られることを指摘されたのであるが、これらの事実も、このような書物の存在を知ることによって、より

よく理解出来るものと云えよう。

次に、更につつこんで、このような総合した形の秘伝が、実際にどのような人々に用いられていたかを考えてみる必要がある。まず森氏前記論文に引かれたものなど、「作庭記」流の庭園論の片鱗の見える室町時代の文献には次のようなものがある。

- (1) 「蔭涼軒日録」文正元年（一四六六）四月十四日の条に、義政が雲頂院の西庭に梅が一本植えてあったのを見て、方庭に木を一本植えるのは困の字になるから忌むべきだと云った記事。
- (2) 「鹿苑日録」延徳元年（一四八九）五月二十日の条の、河原者が来て、四角い庭に木を一本植えるのは困の字になるからいけないと云われているが、かかずらわなくてもよいと云ったという記事。
- (3) 「鹿苑日録」延徳元年六月五日の条の、河原者又四郎が、「在家の庭は滝を東北から落して水を西へ流すが、寺院などでは、仏教東漸の意をもって、西南から滝を落して東へ流すこともある」という知識を述べた記事。
- (4) 「蔭涼軒日録」延徳四年（一四九二）四月二二日の条に引く同じ話。
- (5) 「鹿苑日録」延徳元年六月五日の条の又四郎が「山は君、石は臣」というたとえを引いている記事。

などである。^{註67} これを見ると、「作庭記」流の知識ないし意見を述べているのは、義政と山水河原者である。山水河原者と呼ばれる庭師達は義教が將軍であったころ（一四二九—四一頃）以来將軍家と深い関係を持ち、義政が、万里小路殿、室町殿など多くの庭園を作った時にも彼等が参画しているが、これらの記事から、將軍家関係において、「作庭記」系統の口伝が行われていたことを知り得るのである。しかるに、更に、面白いことには、これらの記事の他に、彼等が、木を植えたり石を据えたりする場合の方角の禁忌や月や日の吉凶を書いた書物を持っていたという記事が、先に引いた「鹿苑日録」延徳元年六月五日の条に見えるのである。方位の吉凶はともかく、月日の吉凶については、「山

水井野形図」に吉日をえらぶべき旨述べるのみで、細かい指示は少くとも現在知り得る限り、「作庭記」にも「山水井野形図」にも見えず、「童子口伝書つき山水井野形図」における「童子口伝書」のあとの数項目に方角の禁忌や月や日の吉凶を記すのを知るのであるが、彼らが、「作庭記」系統の口伝の他にこのようなものを持っていたという記録のあることは、現在「童子口伝書つき山水井野形図」に見るようなまとまった形の口伝を、一冊の書としてではないにせよ、彼等が伝えていたことを考えせしめるのである。即ち、その条には、

晩河原又四郎來。洗庭松。自懷中出一冊曰。是植樹排石擇吉凶選月日之書也。末有一段。而文字難讀。請師加朱墨。以使便于觀見則惟幸。

とある。「末有一段。而文字難讀。」とあるが、河原者とは云っても、彼らかなりの知識があったことは同じ条の他の記事からも明らかであって、簡単な字や文が読めない筈はないから、これが、方位月日の吉凶を記したものであることを考えれば、おそらくこれら難読のところには二八宿の名などが記してあったのであろう。もしそうであるとすれば、ここに紹介する庭園秘伝書の方位月日の吉凶を記した項にある、石を立てる場合の吉宿の日の記事のようなものであったとも考えられる。

現在見る「童子口伝書つき山水井野形図」は、「山水井野形図」の部分にも見られるごとく、かなり省略された形のものであるから、このままの形のものではないであろうが、このようなまとまった形の口伝が彼らの間に伝っていたことは充分に考えられる。

それを裏づけられる事実として、方位月日の吉凶を述べた項のすぐ前に、「寢殿正方不向事共廿一箇条」というのがあることである。寢殿とは当時、大きな第宅の主建築をいい（応仁の乱以後、一五世紀第四、四半期ごろから「主殿」の語がそれにとって変わるが）、これが、寺院関係よりも、むしろ將軍家関係の庭を主たる対象としたものであることがわかる。「山水井野形図」の部分も又、このような目的のために作られたものであろう。陰陽家勘解由小路（賀茂

「童子口伝書つき山水井野形図」の成立とその性格 下

氏）在盛（一四二一—一四七九）は陰陽道の名家賀茂家の出で、宮中及び幕府に重用され、義政時代將軍関係の第宅の造営工事に関係して、立石や植栽の禁忌に関して度々勘申ししていることが、彼の日記「在盛卿記」に見えるが、前述のごとく「山水井野形図」を含めて、「童子口伝書つき山水井野形図」が、彼の名の付され、実際にも彼が彼に近い人物が義政の命によって撰したと考えられている「吉日考秘伝」と同じ思想的内容を持っている面があるということは、彼の属した陰陽寮の人の影響のもとに、彼の活躍した一五世紀中葉をさかのぼること、そう遠くない時期に成立したのではないかということを示唆する。

「在盛卿記」長祿二年（一四五八）閏正月二十九日の条に、

結城勘解由左衛門奉

王相方障與不障條事

一疊御庭耳、石事不苦哉。

一御庭御造畢、以後小石一兩ヶ可被改立事、雖修理無障歟。

一可被植草花綠竹事、無其障、

一凡新造犯上被立大石等、皆可被障之也。

其外御事依繁多、唯今不及覺悟、漸被仰下、引勘舊記、可申上也哉。

閏正月廿九日

刑部卿

とあり、義政の側近、結城勘解由左衛門尉に宛てた書面が写されているが、「引勘舊記、可申上哉」とあることより、在盛に立石や植栽の禁忌に関する、以前からの書物が伝えられていたことがわかり、更に、しばしば將軍家関係の庭園の造作に関係している結城勘解由左衛門が彼の意見を尊重していることがわかる。又、將軍家の庭園造作にしばしば関与している刑部少輔千秋（藤原）勝季も密接な関係にあり、在盛が彼やその周辺の造庭関係者に対して指導的な関係を有していたことは、「在盛卿記」長祿二年二月二十四日の條の、

今日出仕。以千秋刑部立石事御不審。依於御所中一通勘進之。

御庭立石事。入根事不至三尺者。雖爲王相方其憚哉。^(われい)

二月廿四日 刑部卿

と云う記事や、同じく十一月一日の条の

一日、御山水へ可被入始水日。千秋奉之。

今月十五日己亥時辰。十九日癸卯時未。

十一月一日 刑部卿。

という記事などからもわかる。

では、在盛と結城左衛門などとの結びつきはいつごろからであったかを見ると、同じく「在盛卿記」の永享三年(一四三二)の部分に、

永享三年辛亥八月廿二日。天晴。今日室町殿新造御所木作始也。奉行山名

金吾。畠山匠作。此外奉公人々。二番^{結城勘解由左衛門尉。伊勢次郎左衛門尉。}(下略)

とあって、すでに一四三〇年ごろ、義教による室町殿新造のころからであった。このようなことから考えて、一五世紀始めごろに、彼か、彼の先任者か、とにかく陰陽寮関係者の影響のもとに「童子口伝書つき山水并野形図」のようなものが作られたものと推定する。現に、前田家本及び「童子口伝書つき」三本の通伝系図(三本ではその最後)に記された美馬將監浄喜も、永享二年(一四三〇)に室町殿修造に奉行として参与したことが記録されている政所地下であり^{註69}、又、系図で、浄喜の前に記される中任(仁)和尚がいわれるごとく任庵主であるならば、彼は、永享三年同じ義教の室町殿新造に関係して、畠山、赤松などの贈った大石を沙汰し、僧満済と義教がそれを見に行ったことが「満済准后日記」に見えている。^{註70}このような関係で中任和尚から浄喜への相伝が行われたのであろうが、両者共に幕府関係の仕事に従事している事実は注目に値する。下って、現在我々が持つ「童子口伝書つき山水并野形図」に、賀茂の杜家であり右京大夫にも叙せられた賀茂清茂や、陰陽少属有□の名が見えるのも、これ

と全く関係なしとしないであろう。逆に、浄喜と清茂、陰陽少属有□の線を結ぶ時、先の在盛などが持っていた「旧記」なるものは、あるいは現在見る「童子口伝書つき山水并野形図」のもとになる完備した形のものではなかったか、即ち、浄喜の持っていた五巻の書と同じものではなかったかの疑いさえ生じるのである。

筆者は先に、「山水并野形図」の内容が、一々の石や木の形に非常な関心を示している点で鎌倉時代よりも室町時代の特徴を有すると見たのであるが、これら石や木の収集に関する注意と関連して考えられるのは、將軍家、特に義政による、名利名庭からのおびただし数にのぼる石や木の徴集である。これら^{註71}の記録は枚挙にいとまがなく、又、吉永義信氏、「慈照寺庭園の変遷を論ず」などに詳しいので、ここではそれを引かないが、当時の人が木や石の形に非常な関心を示した一例として、義政が寛正三年(一四六二)、母のために高倉御所を造って、そこに西芳寺に模した庭園を営んだ時のことに触れて、村菴靈彦(一四〇四—一四八八)が、その「三体詩抄」の中に記した、

モトノ高倉御所ニ西芳寺ノ庭ヲ移テ、一草一木ノ枝コタチマデ似タヲ、尋テ見セマイラセタゾ

という言葉を挙げる。

以上述べたところで、「童子口伝書つき山水并野形図」の完備した形のがまとめられたのは一五世紀始めごろであり、「山水并野形図」の部分及び、「寝殿正方不向事共廿一箇条」以下数項は新しい内容のもの、「童子口伝書」の部分は「作庭記」などの流れをくむ古い口伝によったものであろうということを見た。

しかし、この作庭秘伝書の流儀によって作られたと筆者の考える室町將軍家関係の庭園はことごとく失われて、義政の東山殿をその死後禪刹とした慈照寺(銀閣寺)が残るに過ぎない。東山殿造営の土地選定はまず寛正六年(一四六五)に結城勘解由左衛門や義政自身によって行われ、その後、一七年後の文明一四

年(一四八二)から実際の造営にかかり、義政の死ぬ前年延徳元年(一四八九)まで続けられた。^{註72}現在の銀閣寺の庭園は吉永義信氏の言われるごとく、東山殿であった頃より何分の一かの規模になっており、慶長の修理などにより細部の改変が行われてはいるが、その地割、石の配置などを「山水并野形図」の図と比べて見ると、なお当時のおもかげが残っていることを充分に思わしめる。

このように、この書は一種の抄本ではあるが、室町時代、一五世紀の將軍家関係に行われ、おそらく他にも影響を与えたであろう造庭口伝の姿をいささかなりとも明らかにし得る点、又、一五世紀の、少くとも河原者と呼ばれる庭師達が実績の上に立って自ら自信を持った発言をする一五世紀終りに至るまでの、將軍家の造庭様式に主たる影響を与えたのは「黒衣の宰相」と呼ばれる程の政治力を持った満濟准后輩下の中任和尚^{註73}や、義教の室町第新造に奉行をつとめた美馬淨喜や、雲頂院への楓樹移植の際などに奉行をつとめた結城勘解由左衛門や、彼に作事の目次を勘申したり、自ら直接作事に関係したりもした勘解由小路在盛など、奉行をも含めた、いわゆる奉公の人々であろうという新しい視点を我々に与える点において、非常に有用であると考ええる。なお、中任和尚の出自やその系統、筆者が鎌倉で相伝されたと考える「童子口伝書」とこの書の書誌的な関係などについては別の機会の研究課題としたい。

註

58 「作庭記」の写本はかなり流布しているが、ほとんどが谷村本で虫喰いになっているところが欠字になっていて、谷村本系統であることがわかるものばかりである。

59 京大本、無動寺本を例にとると、谷村本で、「なし」、「よく」、「のち」、「はに土」、「わすれ」、「その」、「いは」、「の」と、「をを(せ)」、「ね」、「とかくの」、「もちあることもあるへし」、「とあるものが」、「或書云」で、「ナリ」(一頁目第三行)「ヨリ」(一頁目第五行)、「彼」(一頁目第八行)、「ハヤ」(マ)「土」(二頁目第二行)、「荒」

「童子口伝書つき山水并野形図」の成立とその性格 下

(三頁目第一行)「モ」(三頁目第三行)「石」(四頁目第三、五行)「唯」(四頁目第四行)、「ヲシ」(五頁目第六行)「枯」(六頁目第二行)「トニアリ」(七頁目第七行)「可レ用事モアリ」(一四頁目第一行)となっているのは、それぞれ、「なし」↓「ナシ」↓「ナリ」、「よく」↓「ヨク」↓「ヨリ」、「のち」↓「後」↓「彼」、「はに土」↓「ハニ土」↓「ハニ土」、「わすれ」↓「忘(れ)」↓「荒」、「その」↓「其」↓「モ」↓「モ」、「いは」↓「岩」↓「石」、「の」と↓「喉」↓「唯」、「をを」↓「ヲ」↓「ヲシ」、「ね」↓「根」↓「枯」、「とかくの」↓「トカク」↓「トアリ」↓「トニアリ」、「もちろんこともあるへし」↓「可レ有レ用事」↓「可レ用事モアリ」、のように誤写を重ねなければ起り得ない誤りである。

60 ここに述べた一二例のうち、京大本、無動寺本で、「モ」、「唯」、「枯」、「トニアリ」、とあるところが、それぞれ、「其」、「喉」、「根」、「トアリ」と誤写の第一段階を示している他、「可レ用事モアリ」が「可レ用コトモアリ」となっているが、一二例のうち七例までが太田本でも全く同じである。又、ちがっている五例のうちでも、「可レ用事モアリ」「可レ用コトモアリ」は殆んど同じ段階の誤写である。

61 先に問題にした(「なし」↓「ナリ」、「よく」↓「ヨリ」、「のち」↓「彼」、「わすれ」↓「荒」、「いは」↓「石」、「その」↓「モ」)の「唯」、「ね」↓「枯」、「とかくの」↓「トニアリ」、「もちろんこともあるへし」↓「可レ用事モアリ」、等の部分に「後京」として付された校註、「ナシ」、「ヨク」、「後」、「忘」、「岩」、「其」、「喉」、「根」、「トカク」、「可レ有用事」、などを見ると、この校合に用いられた「後京極殿作庭記」なる本は、谷村本「作庭記」、又はその非常に近い祖本と、この「或書云」の中間的な性格のものであったことがわかる。しかし、「或書云」一頁目第三行(頁数は京大本、無動寺本による)に「クセミ」とあるのは、校合本では「セバミ」とあるが、谷村本に「クセバミ」とあるのが意味の上から云っても最も正しく、「クセミ」も「セバミ」も「くせばみ」(又は「クセバミ」)からの間違いであって、「セバミ」が誤写されて「クセミ」になるとは考えられないので、「或書云」とその校合本は厳密には同じ系統、即ち同一線上にあるものではなく、この校合本は、谷村本と「或書云」との共通の祖本と「或書云」の中間から分れた一異本であったと見られる。このようなことを示す箇所は他にも幾つかある。

62 即ち、谷村本に「荒磯におき山の崎」^{朱書入(の)}となっているところは京大本、無動寺本の「或書云」(九頁目第一行)では「荒磯ノ崎」^{朱書入(沖山ノ後京)}「つきて」^{朱書入(取付)}とあるところは「ト。ツキ

テ(九頁目第八行)、「まかれる」は「ナカレ」(一頁目第二行)となっており、
朱書入(丹生明神也)又、「一人のおきなあり」も、「或書云」一七頁目第二行の校合本による補入の部
 分に「一人ノ翁アヘリ」となっていて、これらの谷村本における校註の文は、文字
 遣いは別として、「或書云」校合本のそれと全く同じであることがわかる。(但し

「丹生明神也」は「或書云」には見えない。)又、「あら、か」とあるところは「ア
 ララカ」(六頁目第四行)、「ほりしつめた」は「ホリシツメタル」(一二頁目第二行)、
朱書入(タカク)「た(か)かく」の前の「か」は余りよく見えない)は「タカク」(一三頁目第
 一行)、「かれこれやう」は「彼是ノ様」(一四頁目第一行)、「舎屋のすた」は「舎屋

ノ下」(一五頁目第八行)となっていて、いずれも、「或書云」の本文と、文字遣
 いはともかくとして同じ言葉であって、校註がないことから見て、「或書云」校合
 本においても同じであったと思われる。しかし上に述べたうち、「まかれる」の横

の「曲」、「あら、か」の横の「荒」及び「丹生明神也」は後にも触れるように、書
 風も他の傍註と異り、「曲」も「荒」も異文というより、仮名を漢字に直したとい
 うものであるから、校註ではなく、意味をわかりやすくするための付加と考えられ

るので、こゝでは問題にならない。むしろ、これは、次に述べる片仮名を用いた校
 註と一体のものとして考えるべきである。谷村本の「或書云」と比較し得る部分の
 校註で先の例にもれた三つのうち二つ、「たて」、「或書云」第一頁第三行、

「一立テ」、及び、「口伝アリ」(「或書云」第一頁第三行に相当するが、「或書
 云」にはなし)、は、この二つの校註(但し「口伝アリ」は校註でなく私意による付
 加かとも思われるが)だけが、片仮名であり、「或書云」にも、その校合にも見え

ないことから考えて、「或書云」の校合本とは無関係な別の異本による校註である
 と考えられる。書体から見ても、谷村本の平仮名の校註は本文とは同じ時代に施
 されたと思われるのに対し、片仮名の校註及びいくつかの漢字の朱の書入れ、例え

ば前述の「曲」「丹生明神也」「荒」はそれより遅い時代に施されたものと見られ
 る。残りの一つ「山(石の)」も、「或書云」一頁目第三行では、「山石」となっ
朱書入(山ノ石也)ており、「山」と「石」の間の(一)だけが、「或書云」校合本と近いテキストの写

本によって「岩」とすべく施され、(二)山ノ石也)は他の異本によったもので、一
 番上の難読の字はその異本を示す記号の文字であったと思われる。

63 「大正新脩大藏經」第四五卷所収「中天竺舍衛國祇洹寺図経」の中から、「童子口

伝書」のこの部分の記事の根拠となつたと考えられる箇所を引用すると、次の如く
 である。

「此寺大院但列三門於三方。……南面三門中央大門……門外渠水飛橋北跨亦有五
 道。彫飾之異特非人有。東西二門三重同上俱有三間。門外飛橋三道亘入外有林
 樹。」

「次以巷北一院名教誡比丘尼院。……前西北有一大院。名他方諸仏之院。……
 内有林池花樹充滿。東西二門對大街開。大梵天王化作十二方石。清淨光潔仏坐
 上。」

「上七院者並在大門之東東門之西。其中渠流交過通徹清潔。……南面東門如上
 三重。直北跨橋有鳥頭門。」

「初南西有一院。名大梵天王之院。……又院内有玉池。池内金蓮花。」

「次東一院名知時之院。……其内曾有漏剎院。中復有黄金須弥山海水。山中奇
 事不可述盡。」

「又次東一院名大仏像院。門向西闕。於中莊嚴堂宇宝城花果池林言不能述。」

「西畔一院名文殊師利菩薩之院。……花池林竹天人集会。」

「最南東邊第一名菩薩四諦之院。……林池充滿。」

「次小巷北一院名緣覺四諦之院。……中有大堂林池清淨。」

「又小巷北東西自分二院。西畔一院名學人住止聽法之院。……堂池林映如上不
 殊。」

「次小巷西一院名學人四諦之院。門向東巷中有堂樹。余如上說。」

「次小巷東一院名角力之院。……内有黄金須弥山。山上有日月星辰。」

「上諸院内各一大堂林。……大橋連隔但有三门。巷中二渠並向西流行。樹鬱映冬
 夏常茂。……亦開五道。又南大橋高峻崇麗。下水西流清潔澄淨。……道之左右列
 種奇花菓異樹。」

「不遠有大方池。池中蓮華四時遍滿。四色殊絶香氣芬郁駿烈未開。」

「次北有大仏殿。……東西夾殿大樹莊嚴。冬夏常榮重陰蔽日。殿内簷下角内有二香
 山。是往古毘婆娑竭羅竜王所造。初成之日始由乾陀山高半山。凡夫所見高一丈二尺。

其形同一須弥。半要以下全用金銀。頂有大池。四面獸頭狀等阿耨達池。山有樹林
 花菓。山王四面莊嚴皆用四宝所成。山色多紫檀牛頭沈水等樹。花如車輪。凡夫見

者止如錢大。至六齋日花悉開。水流下地都不見。山所有樹木皆能說法。山下九竜常吐香雲出水香潔。於六齋日病者飲之無不即愈。如來有時与十方仏來集說法。感百億諸仏菩薩天竜八部悉入山中。声聞衆中十大弟子亦得從入。諸余事相説不可尽。」

「第二大複殿。……於池四面各有八行宝樹。四角各有金山。多有齋林吞池。池水流注入大地中又有諸鳥。」

「戒壇院内……有大池中有九金竜向上盤結。……其池四面砌以白玉下布銀沙。池水水者散脂大將施水色清甘如乳不異。」

「次東一院名修多羅院。……周房邊之蓮池流渠林樹交影。」

「北大院名仏洗衣院。……周房三匝方石円池天之所作。花林交植香淨充滿。」

「大院東大路之左名供僧院。路關三里有林樹一十八行。花葉相間東西兩渠北流清駿。西辺渠者從大院伏寶東出北流。」

「次北一院名曰菓園。……山池極多各施異狀。渠流文轉繚遶泉林。清淨香氣充滿斯地。」

なお、この經典の大正大藏經所収本には円珍の元慶四年（八八〇）八月一日の跋がついている。

64

この「或書云」にその校合本から引用する奥書、
正応第二夏林鐘廿七朝徒然之余披見訖

愚老判

此奥書天台座主慈信僧正也

後京極殿御書

重宝也可秘々々判

慈信僧正在大乘院中円明寺殿下

実経公之男号大居三昧院敷可尋之

鶴翁判

のうち、「正應第二夏……愚老（花押）」及び「後京極殿……可秘々々（花押）」は、谷村本「作庭記」にそれ／＼自筆で書かれており、この奥書だけから考えれば、その転写本において、まず「此奥書天台座主慈信僧正也」が書き加えられ、更にその後、鶴翁と号する人によって「慈信僧正在大乘院中円明寺殿下実経公之男号大居三

「童子口伝書つき山水并野形図」の成立とその性格 下

昧院敷可尋之 鶴翁（判）」と書き加えられたことになる。この奥書の成立順序はこれで間違いないと思うが、奥書は簡単に他の写本から書き移されることがあるので、自筆でない奥書からその写本の系統をたゞちに考えることは困難である。しかし、この場合は、谷村本で虫喰いになっているところが、空白になっていることから明らかに谷村本の転写本であることがわかる写本で、これと同じ奥書を持ったものが京都府総合資料館本などかなり多く流布しており、これが谷村本に一度目に加えられた校註の影響を示しながら、二度目に加えられたと考えられる校註を含んでいない点などから、この奥書は谷村本系統の写本の奥書として成立し、この「或書云」校合本の校合に用いられた本も、谷村本系統のものであったと考えられる。

なお、水戸の彰考館には、「一本ニ」と傍記して「正応……」から「可秘々々」までの奥書を持つ「作庭記」の写本があるが、これにはその奥書と、更に、架蔵の庭記と前田家の「作庭記」とを木下順庵に校合させたという儒医野間三竹（柳谷、一六〇八―七六）の寛文六年（一六六六）の奥書とを清水宗川（一六一四―？）所蔵本より写した旨の付記があり、初めの奥書のうち、「此奥書慈信僧正也」の横に「此一行無之」とあるから、柳谷が一六六六年に架蔵本を順庵に校合させた時までには、すでにこの一行も成立していたと考えられる。又、最後の「慈信僧正……」以下を書いた鶴翁がいかなる人かこれまで余り論ぜられていないが、それは、鶴翁とも号した有名な有職故実家、壺井義知（一六五七―一七三五）であることはまず間違いない。壺井義知は河内に生れ、大阪、松本、加賀をめぐり、金沢には十年滞在したといわれるから、前田家の「作庭記」を見る機会もあったであろう。彼は貞享二年（一六八五）京に出て、四辻家の青侍となったが、一家の目を立て時に堂上方の誤謬を指摘して憚りなかつたと云われる。

65 「作庭記」の重要な異本としては、小沢圭次郎氏が見たと、同氏前掲書並びに「国華」二三号（明治二十四年）に記しておられる「山水抄」がある。それを小沢氏が写された稿本が最近某図書館に入り、その目録にも載せられているが、紙数の関係もあり、こゝでは深く触れないことにする。

66 「建築史」一卷五号、昭和十四年。

67 それぞれの原文は次の通りである。「蔭涼軒日録」は大日本仏教全書所収のも

の、「鹿苑日録」は辻善之助編集のものによる。

(1)雲頂院御所間西庭。植二一株梅樹一相公御覽之而曰。凡方庭植二木一必忌也。所以何。是窮困ノ々之字也。以三梅樹一兩株一植ニ添之。則可乎之由。懇々被レ仰。尤希有之尊言。是為二我院之寵榮一也。

(2)当院河原者来。献予帚二本。上履一雙。百錢与之。此者跪庭上。説以山水事。方島中栽一木則困字也。雖然。不必拘之。先是於某人宅。嘗山水栽一木。有僧誥之。某曰。主者女也。女者陰也。所栽之木桜也。桜者号以花。々者春之物乃陽也。陽相對尤可也。一僧嘿然云爾。

(3)又曰。昔実相教師庭前為山差石。自未申出瀑水。向東而下。門主曰。凡山水皆自丑寅而流下。此様不可乎。白曰。在家之庭皆然。五山大小利。門跡等。自西向東亦可也。門主曰。何之謂也。白曰。仏法東漸之義也。門主領之。

(4)又云。於三井之房中一命我造二飯山一。以西為二滝頭一。彼主人云。西為レ頭者不理也。以東為レ頭可也。我云造レ庭之法如主人言。雖然於二出家之庭一者以西為レ頭之儀有レ之。蓋仏法東漸之義也。不識レ之乎云々。主人云。聽二其命二云々。

(5)又曰。凡為山竝石皆有法。不知之而為之必凶乎。東坊就讃州太守陪臣東条宅累土為山。々小而上按大石。某曰。必有凶也。不過七十五日乎。蓋山者君也。石者臣也。君臣上下相蓋。甚不可也。

68 文献には多く「刑部少輔千秋」と記すが、「在盛卿記」長禄二年二月五日の条に、「刑部少輔千秋勝季」とあり、「尊卑文脈」にもその名が見える。

69 本論考、上、三〇頁参照。

70 統群書類従補遺所収。永享三年十二月七日の条。

71 昭和十五年、自費出版。

72 義政は延徳二年正月七日に没した。

73 任庵主は、醍醐寺の門主満済が永享二年（一四三〇）三月に金剛輪院の作庭を行った際、その実際の監督に当たったこと、又、永享三年足利義教が室町殿を新造した際、任庵主が畑山、赤松などの贈った大石を沙汰し、義教が満済と共にそれを見に行ったこと、が、いずれも「満済准后日記」に見え（註70参照）、満済の影響下にあった人物らしい。

「童子口伝書つき山水并野形図」本文公刊は本誌第二四七号に掲載。

図版要項

一 山本芳翠筆 臥裸婦（原色刷）

油絵 麻布 縦八五・五 横一三六・五

神奈川 桂 重 鴻 氏 蔵

二 同 巖島山中紅葉之図

油絵 麻布 縦五九・九 横四四・八

宮 内 庁 蔵

三 同 那覇港之景

油絵 麻布 縦四三・三 横五八・五

宮 内 庁 蔵

四 同 唐家屯月下歩哨図

油絵 麻布 縦八八・三 横一四九・五

宮 内 庁 蔵

一一四 隈元謙次郎「山本芳翠について」参照

五・六 病草紙（不眠の女） 全図・部分拡大二・四倍

紙本着色掛幅装 縦二五・九 横四一・二 縦（詞一四・五） 横（絵二六・七）

京 都 河 本 嘉 久 蔵 氏 蔵

五・六 秋山光和 図版解説「病草紙（不眠の女）」参照